

2018 年度(第 1 回)日本天文遺産について

2018 年度第 1 回日本天文遺産は、2019 年 1 月 26 日の代議員総会で次のように決定しましたのでご報告いたします。

- ◇ 明月記
- ◇ 会津日新館天文台跡

認定理由は次ページ以降をご覧ください。

2018 年度(第 1 回) 日本天文遺産 認定理由

1. 名称：明月記
2. カテゴリー：史跡・建造物、物品、文献
3. 所在地：京都府京都市
4. 現在の管理者または所有者：公益財団法人 冷泉家時雨亭文庫
5. 文化財指定や登録の状況、他の学協会等の遺産認定：
2000(平成 12)年 国宝
6. 現状：
保存公開中、保存中(非公開)、公開中(保護対策なし)、
使用中、放置、廃棄・売却見込
その他：

7. 認定理由

明月記は、新古今和歌集や小倉百人一首の撰者として知られる藤原定家(1162～1241)が建久 3 (1192) 年から天福元 (1233) 年の間に記した日記である。本文献には、望遠鏡発明前に観測された超新星のうち 3 件 (1006 年、1054 年、1181 年) が記載されているほか、日食や月食、オーロラなどの天文現象についての記載があり、天文現象の古記録としてきわめて重要な意義を有する。

明月記の名を特に世界の天文学者に知らしめたのは日本のアマチュア天文家の射場保昭氏で、彼は 1934 年にアメリカの天文雑誌“Popular Astronomy”の中で明月記に客星(突然出現した星)の記録が複数記録されていることを紹介した¹。この当時、天文学では超新星に関する研究が盛んに行われていたことから射場氏の記事は海外の天文学者に注目され、おうし座のかに星雲は明月記に記録された 1054 年の超新星の残骸であると同定した 1942 年のメイヨールとオールトの論文でも射場氏の報告が参考文献として引用されている²。

なお、当時の日本では天文現象はこの世を支配する「天」からのメッセージであると考えられており、為政者が行う政治と密接な関係を持っていた。そのため、現在の国立天文台にあたるとも言える陰陽寮という役所では、天文官が日々空を観察し、その変化をつぶ

¹ Iba, Y., 1934, Pop. Astron., 42, 251

² Mayall, N.U. & Oort, J.H., 1942, PASP, 54, 95

さに記録していた。その中で、貴族である藤原定家も天体現象に強い関心を持ち、自ら天を観察するだけでなく、過去の例なども調べている。1054年の客星の記事は藤原定家が実際に見たものではなく、過去の客星出現例を陰陽寮に問い合わせた際の回答を日記に綴り込んだものである。

明月記は天文学の専門的な文献資料ではないが、そこに記されたさまざまな天体現象の古記録は、近代科学に貢献したことも含め、歴史的に非常に大きな価値を持つものである。以上のことから、明月記を2018年度の日本天文遺産に認定する。

2018 年度(第 1 回) 日本天文遺産 認定理由

1. 名称：会津日新館天文台跡
2. カテゴリー：■ 史跡・建造物、□ 物品、□ 文献
3. 所在地：福島県会津若松市
4. 現在の管理者または所有者：会津若松市教育委員会（所有者：会津若松市）
5. 文化財指定や登録の状況、他の学協会等の遺産認定：
1968(昭和 43)年 会津若松市指定史跡
6. 現状：
■ 保存公開中、□ 保存中(非公開)、□ 公開中(保護対策なし)、
□ 使用中、□ 放置、□ 廃棄・売却見込
その他：
7. 認定理由：

日新館天文台は、旧会津藩校日新館（1803 年完成）に設けられた天文台である。江戸時代の天文台としては、東京では浅草などの幕府の天文台、地方では水戸藩、薩摩藩、阿波藩などの天文台が知られているが、現在ではすべて失われてしまっている。日新館天文台跡は、ドームのような建屋を持つ近代の天文台とは全く異なる江戸時代の天文台の遺構として、現存唯一のものである。現存部分は天文台（露台）のおよそ半分であるが（北半部は 1925 年以前に取り壊され滅失している）、露台の高さはほぼ原状を保っていると推定される。天体の位置を測定し精確な暦を目指した当時の日本の天体観測の様子が体感できる貴重な遺跡である。

天文台の現存部分は市指定史跡として保存されているが（市有地）、すでに取り壊されている露台の北側部分を含めて周囲は民有地となっており、今後の開発による環境悪化が危惧される。一方で日本天文遺産として認定が行われた場合、それを契機に周辺の遺構の調査や保存措置が進むことが期待される。

以上のことから、会津日新館天文台跡を 2018 年度の日本天文遺産に認定する。



天文台西側（台上の祠は天文台とは無関係）
向かって左側（北側）が取り壊されている。
以下いずれも2018年11月19日撮影



天文台南側面（南東側から撮影）
こちら側は滅失していない。



天文台北西側



天文台北側
さらに手前方向（北方向）に露台が広がっていた。



天文台北東側



天文台上から東方向を撮影（写真の奥方向が東、左手が北）